



市長のふれあい訪問



「短歌・ほおずきの会」

短歌をとおして高齢者や障害者の方々と交流し、作品集を発行したり投稿者と交流会などを開催している「短歌・ほおずきの会」。高齢者や障害者の方々が社会的に孤立しないよう活動しているこの会を岡村市長が訪問し、短歌によるボランティア活動についてお聞きしました。

市長 みなさんこんにちは。平成20年に入り、1月は大変寒い日が続きましたが、2月に入りまして、春の訪れが待ち遠しいという感じがします。

今月の市長のふれあい訪問は、ボランティア団体、「短歌・ほおずきの会」のみなさんです。どうぞよろしくお願ひいたします。

短歌をとおしてのボランティア活動団体とのことですが、まずは金子会長から会の概略をお聞かせください。

金子 高齢者や在宅療養者、そして障害者の方々などを含めた会員みんなで支えあつて行こうと平成7年に立ち上げました。

市長 現在、会員は何人いらっしゃるのでですか。

坂本 35人います。最高齢で93歳の方も3人います。手づくりの作品集には会員全員の短歌を掲載し、1冊の本にして会員やボランティアのみなさんに配布しています。

市長 この会は、どのような経緯で発足したのですか。

関 私がかつてホームヘルパーをしていた時に、当時の利用者で短歌をやっている方がいて、短歌のお話や、せっかく作った歌を発表する場がないのかと要望がありました。たまたま、その当時の社会福祉協議会の所長が、協議会で働く職員は、何でも良いからボランティアを一つ以上するようにとの指導もありました。そこで、お年寄りのみなさんが作った短歌を発表する場がないものかなど、

当時のヘルパー職員が集まり、考えた結果、

短歌を活用したボランティアができるのではとのことで始めました。

市長 金子さんも当時、社会福祉協議会に携わっていたのですか。

金子 はいそうです。短歌でのボランティアをしてくれないかとの話がありました。どうしたら短歌でボランティアができるのかと半年ほど考えました。利用者のみなさんが、どのような形で短歌をやりたいのか、直接、ヘルパーと一緒に訪問し、お話を伺ったりもしました。

最初は、お年寄りの自宅へ訪問し、短歌の指導などをしていましたが、現在は、郵送で受け付けし、添削などを行っています。

市長 岩崎さんは、当時からこのような会があるということをご存じだったのですか。

岩崎 知りませんでした。しかし、定年退職して、何かボランティアをしたいという気持ちがありましたので、当時、社会福祉協議会へ相談に伺いました。当初は、紹介された老人介護のボランティアを始めたのですが、その後、この会のことも知り、短歌に興味もあつたので、参加させていただくようになりました。

市長 そのような方々が、一人増え、二人増えて、現在に至るのですね。その中に高橋さんもおられたわけですか。

高橋 ええ、定年退職を機に水彩画と短歌を始めました。その時、ほおずきの会の存在を知り入会しました。入会して感じたこと

は、とても楽



しく、また、いろいろな方と知り合えました。趣味を生かすと同時に社会貢献ができるので、今では、この会での活動が私の生き甲斐になっていま

市長 今後は、団塊の世代の方々が、どんどん地域に戻ってきますので、高橋さんのような考えをお持ちの方が増えてくれれば、ありがたいなあと思います。

ところで、会員のみなさんの交流会などは開催されているのですか。

関 グリーンセンターで、年1回、交流会を兼ねて5月の緑のきれいな時季に勉強会を行っています。障害者の会員も参加しています。

市長 今、私の手元にある作品集の中に、「退院の挨拶すれど物言えず重病のひとまばたきで返す」と、かなり深刻な短歌がありますが、見事に作者の心情を歌い上げていると思います。日本語は、本当にすばらしいと感じました。

最後にPRも兼ねて今後の抱負などをお聞かせください。

金子 現在、年1回発行している作品集は、まだ薄っぺらいものですが、今後はもっと厚くなるようにして、障害者の方も、在宅で介護されている方も、みなさんがこの作品集に掲載されることが楽しみに思っています。そのような会にしていきたいと思っています。

市長 ぜひ、これからもがんばってください。今日は大変ありがとうございました。

今日は大変ありがとうございました。

